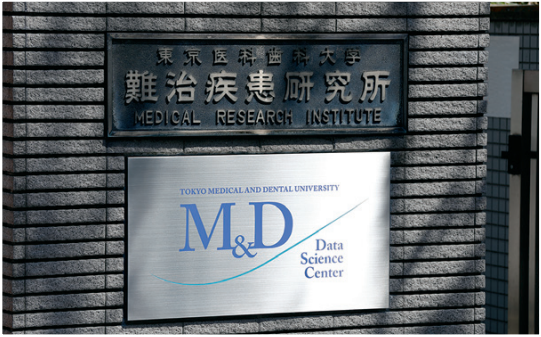


歴代所長および在籍した教授からのメッセージ

難治疾患研究所の所長経験者をはじめ、在籍した教授からの寄稿文をご紹介します。

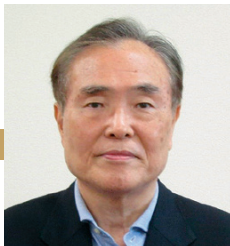


生き方を学んだ難研への想い

在任期間：1996年～2016年

北嶋 繁孝

Shigetaka Kitajima



私の教員生活は、母校での数年を除いては、スタートから終わりまで難研です。「蛋白精製から遺伝子発現まで」のテーマで、遺伝性メトヘモグロビン血症、糖代謝酵素、PolIII基本因子の精製、ストレス応答のシステムズ解析をやりました。学生やスタッフとの触れ合いも貴重な思い出です。

私が研究所長を務めた頃は、共同利用共同研究拠点、難研テニュアトラックの人材育成が同時進行し、内外の問題に研究所全員で取り組みました。研究は、個人プレーですが、国や社会から大学・研究所の組織としての在り方を問われた時代だったと思います。

それと、3.11午後2時46分。大学の門近くで感じた大きな揺れと地響き、それに続く福島原発のメルトダウンの衝

撃は忘れられません。その年末の東北大学加齢研の80周年記念会に医学生物会長として出席した私は、2日目に式を抜け出し、乗り継いで石巻に行きました。高台の日和山からみた光景は、TVでみる映像そのものでした。後日、品川からボラバスに乗ってボランティアにも参加しましたが、この経験は、私に「浄化人心、小欲知足：Purify your mind by curving desire.」、「浄化社会、關懷他人：Refine your community with kindness.」の言葉を教えてくれました。

今後の難研の方々に望みたい研究者としてのマインドでもあります。皆様に感謝するとともに、今後の発展をお祈りいたします。

1977年九州大学医学部卒業。1982年同大学院卒業、テキサス大学ボストク。1986年東京医科歯科大学難治研人類遺伝助手、エール大学Research Associate。1991年東京医科歯科大助教授、1994年九州大学医学部助教授、1997年東京医科歯科大学難治疾患研究所遺伝生化学分野教授、2016年東京医科歯科大学名誉教授。

難治疾患研究所の50周年をお祝い申し上げます

在任期間：1991年～2016年

野田 政樹

Masaki Noda



難治疾患研究所の50周年の記念に心よりお祝い申し上げます。

小生は1991年より2019年まで難治疾患研究所にお世話になり、教授の先生方に大変ご指導を頂き心より御礼申し上げます。

また研究所の多くの職員および事務のスタッフの方々にそれぞれの分野におきまして御指導を頂き感謝致しております。研究所の運営、人事、財務、評価をはじめ4大学連合の講演会を含む諸活動、21世紀Center of Excellence Program、Global Center of Excellence Program、Medical Top Track、ファカルティーデベロプメント、オープンキャンパスなど、研究所の皆様が大変御多忙の中でのご指導とご支援に衷心より深謝致しております。

学内での医学部、歯学部、生体材料工学研究所との連携に加え国立大学研究所の連携活動も含め学外の研究組織との御協力ならびに非常に多くの若手研究者の方々の御育成も大変多くの先生方のご尽力の賜物と存じます。入職をさせて頂きました頃の研究所は湯島地区と駿河台地区の二つに分かれておりましたが現在のように一つの建物に統合され飛躍を継続されておられることも多くの先生方のご努力の成果と存じます。

新しい時代に向けての難治疾患研究所の益々のご発展を心より祈念しております。

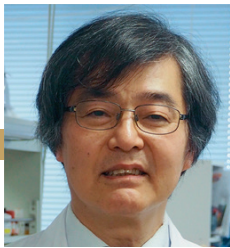
1977年東京医科歯科大学卒業。難治疾患研究所 分子薬理学 教授。東京医科歯科大学名誉教授。東京医科歯科大学再生医療研究センター非常勤講師。

難治疾患研究所 50周年に向けて

在任期間：2003年～2021年

石野 史敏

Fumitoshi Ishino



難治疾患研究所設立50周年、おめでとうございます。

東京医科歯科大学が新しく生まれ変わる直前のタイミングで、この日を迎えることに深い感慨を覚えます。この間には、生体材料工学研究所とともに、生命情報科学教育部、疾患生命科学研究所という新しい大学院組織を作って活動した時期がありました。その理念に賛同して私もこの研究所に移ってきましたが、教員、学生ともに理想に燃えていた時期で、充実していた日々が思い出されます。湯島地区と駿河台地区に分かれていた本研究所がMDタワーに集結でき、設立以来の長年の願いも叶いました。また、全国共同利用・共同研究拠点としての活動も高い評価を得てきました。

来年度にスタートする東京科学大学は、東京工業大学

という異なる文化と歴史を持つ大学との融合であり、研究所も新たな激動の時を迎えることになると思います。しかし「基礎研究者に感銘を与え、尊敬されるような基礎研究を行う」という本研究所の使命は変わりません。設立40周年記念事業の際には、過去の先生方の業績を辿り、そこに幾つもの独創的な研究・思想を見つけることができ嬉しく思いました。今、ここに集っておられる先生方も、ご自身の研究を独自の思想にまで高めることで、大学ひいては世界の科学の発展に貢献していただけるものと信じております。また、そのために、本研究所が皆様にとって満足のいく研究・教育の場であり続けるよう、祈念しております。

1978年東京大学理学部生物化学科卒業、1983年東京大学大学院理学系研究科生物化学専攻博士課程修了、1983年東京大学応用微生物研究所助手、1991年東京工業大学遺伝子実験施設助教授、2003年東京医科歯科大学難治疾患研究所エビジェネティクス分野教授、2021年東京医科歯科大学名誉教授。



難治疾患研究所に育てていただいたこと

在任期間：1995年～2019年

木村 彰方

Akinori Kimura



50周年おめでとうございます。40周年史の編纂に携ってから10年が経ったことに、光陰矢の如しの感があります。

九州大学大学院で分子遺伝学的手法を学び、パスツール研究所で組織適合性（MHC）研究を開始し、帰国後に九州大学生体防御医学研究所でHLA（ヒトMHC）研究と遺伝性心筋症研究に取り組んだことが、私のライフワークになりました。平成7年に研究所に赴任した際には、研究生活の集大成の場を得たと思いました。

研究に取り組むと同時に、管理・運営にも関わりました。就任後まもなくから教授選考委員会や将来構想委員会に加えていただき、平成12年に国立大学法人評価の試行で研究所が研究評価の対象となった際に、当時の谷口

所長に対処を依頼されたことが評価事業に関わるきっかけで、鈴木学長の下で学長特別補佐、大山学長の下で副学長、吉澤学長の下で特命副学長、田中学長の下で理事・副学長を務めましたし、学外でも大学機関評価に関わりました。また、平成12年にゲノム研究を目的とする特定領域研究班が設置され、私も「循環器疾患関連遺伝子群の解明」で計画研究班を構成して参加しましたが、その際にゲノム解析研究の倫理指針が制定されたことが、私が倫理審査に関わるきっかけとなり、現在も学内外で倫理審査に関わるなど、研究所に育てていただき、感謝しています。

1978年3月九州大学医学部卒業。1983年3月九州大学大学院医学研究科修了（医学博士取得）後、九州大学生体防御医学研究所助手。1983年9月パスツール研究所留学（博士研究員）。1986年4月帰国復職。1992年4月九州大学生体防御医学研究所助教授。1995年3月-2019年3月東京医科歯科大学難治疾患研究所教授。

50年の半分

在任期間：1996年～2022年

鐔田 武志

Takeshi Tsubata



創立50周年、おめでとうございます。私は1996年に着任し、2022年に退職しましたので、50年のうち半分の期間、難治疾患研究所に在籍したことになります。その間に研究所は大きく変わり、私自身その変化に関わってきました。赴任後最初の仕事は遺伝子組換えマウス実験室を研究所内に設置することでした。この実験室がゲノム解析室などとともに構成した研究支援施設は、一時は海外の一流の研究施設と遜色のないコアファシリティーとなりました。私自身は、その後、新大学院組織（改組を経て生命理工医療科学専攻）の設置、国際プログラムの運営とそのための海外の大学との連携などに関わりました。新大学院では、徒弟制度的な教育から組織的な教育へと変革するため、複数指導教員制、学位審査の透明性の向上、連携大学院

の設置、他大学との単位互換による共通プログラムの設置などを行い、これらの制度は現在も活かされています。国際プログラムでは、国費外国人留学生優先プログラムに途切れることなく採択され、これを活用して海外からの優秀な留学生を継続的に採用し、国際化を進めてきました。中国医科大学との継続的な交流は、大学レベルでの交流協定締結に発展しました。個々の教員、研究者の活動は、研究所という組織の発展にとって大きなインパクトがあります。個々の教員、研究者が存分に活躍できる環境が整備され、難治疾患研究所が益々発展されることを祈念いたします。

1981年京都大学医学部卒業。1987年京都大学医学研究科修了、ドイツ連邦共和国マックスプランク免疫生物学研究所、京都大学医学部助手、助教授をへて、1996年-2022年東京医科歯科大学難治疾患研究所免疫疾患分野教授、2003-2010年東京医科歯科大学大学院疾患生命科学部部長、2022年日本大学歯学部客員教授。

ほぼ四半世紀お世話になりました

在任期間：1998年～2022年

稲澤 譲治

Johji Inazawa



1998年4月1日、前任地より派遣してもらったポスドク1名と企業から参加の2名とともに4名で私の難研での研究生活がスタートしました。寸暇を惜しみ研究に注力する日々が意気軒昂に音を立てるがごとくに過ぎました。JST・CREST（2002-6年）、経産・NEDO（2006-11）の大型事業の研究代表者として、高精度ゲノムアレイの作製と関連技術を開発し、癌や遺伝性疾患のゲノム異常の探索研究を進めました。それら技術開発の成果はブレイクスルーをもたらしました。癌ドライバー遺伝子として見出されたGASC1、cIAP1、PPM1Dなどは今や創薬開発の標的分子となっています。2008年に先天性小脳脳幹部低形成症の女兒に原因遺伝子CASKの欠失を発見しました。2021年には「CASK異常症」は小児慢性特定疾病として公

1982年京都府立医科大学卒、同病院研修医、1991年医学博士、1993年同講師、1996年東京大学助教授（医科研ヒトゲノム解析センター）、1998年-2022年難治疾患研究所分子細胞遺伝学分野教授、2011年学長特別補佐、2012年疾患バイオリソースセンター長、2014年副理事（研究担当）、2022年4月学長賞。

的医療費助成の対象となりました。また、2012年には学長のご理解のもと、東京医科歯科大学疾患バイオリソースセンター（BRC）が全学対応施設として設置され、センター長を拝命しました。

この間、総計 78名の学位（博士）研究を指導しました。全員が国際誌に原著論文を発表し、多くが若手対象の奨励賞等を受賞しました。前任地を含めて指導した大学院生・スタッフ等からは15名が大学教授等のPIとなり、他3名は公的病院長の要職に就いています。振り返るとほぼ四半世紀、私はPhysician Scientistとして幸せな日々を難研で過ごさせて頂きました。どうも有難うございました。

想い出

在任期間：2002年～2022年

三木 義男

Yoshio Miki



私は2002年4月に分子遺伝分野に安河内教授の後任として着任し、2022年3月の定年までお世話になりました。大学院生の頃、兵庫医科大学外科学で東京医科歯科大学から来られた宇都宮譲二教授に師事し、先生は大腸全摘術が得意であり、その診療には家族性大腸腺腫症（FAP）患者が集まり、それが遺伝性腫瘍との出会いでした。また、当時、難治研・細胞遺伝の外村教授の研究室とFAPに関する共同研究を行ったこともあり、難治研への赴任はご縁のようなものを感じました。

1994年、私は遺伝性乳がん・卵巣がん原因遺伝子BRCA1を報告し、難治研に赴任後も一貫してBRCA1とBRCA2の機能の研究を続けてきました。両遺伝子はDNA修復に機能することから、「DNA修復機能障害と発

がん」をテーマに研究を進めています。

2013年に米国の有名な女優がBRCA1の病的バリエーション保持者で予防的乳房切除術を受けた経緯や心情を雑誌「TIME」で公にしました。これを機に、日本でも遺伝性乳がん・卵巣がんを主とした遺伝性腫瘍に注目が集まり、診療体制の整備が進み、東京医科歯科大学においては専門外来としてHBOC・ハイリスク外来（乳腺、婦人科）が設置されるに至りました。

長年のご指導をいただいた先生方やご支援いただいた全てのスタッフの皆様にご心より感謝申し上げます。難治研の益々の発展をお祈りしています。

1981年和歌山県立医科大学医学部卒業。1990年兵庫医科大学大学院医学研究科修了、医学博士。1982年兵庫医科大学第二外科研修医、1989年がん研究会がん研究所研究員（嘱託）、1991年米国ユタ大学医学部医療情報部門、1995年がん研究会がん研究所研究員、主任研究員、部長。2002年-2022年難治疾患研究所分子遺伝分野教授。



難治研駿河台棟最後の居残り組

在任期間：2002年～2021年

村松 正明

Masaaki Muramatsu



分子疫学教室は2002年に難治疾患研究所の駿河台棟（現在の22号館）の最上階9階でオープンしました。以前疫学教室のあった場所を分子疫学教室に看板を替えてのスタートでした。初期のスタッフや大学院生たちと当時は最新鋭の機械を揃えて「SNP大量解析ラボ」を構築して分子疫学研究に勤しみました。後に人も増えてきて8階にも部屋を頂きました。やがて湯島地区にM&Dタワーが着工され、川の対岸で次第に高くなっていくビルを眺めながら研究の日々でした。M&Dタワーが竣工され、いざ難治研がM&Dタワーに移転となった時、一部の教室は入り切らず、駿河台棟に残ることになりました。分子疫学も駿河台に残る方に手を挙げ、9階から2階にラボを移して、研究を続けました。当時、大学院生命情報科の大学院講

義にも難治研駿河台棟の一階を使っていました。生材研と合同で間の広場で夏の納涼会を開いたことも楽しい思い出です。結局、分子疫学以外の教室は全てM&Dタワーに移転し、最後の居残り組として2015年まで駿河台に留まりました。それから2022年までの最後の数年はM&Dタワーの24階の北東にラボを構えました。高層階からの見晴らしは素晴らしく、晴れた日には遥か遠く筑波山を眺められました。それでも自分にとって難治研といえバ古い駿河台棟が懐かしく、身の丈にあった居心地良さがありました。駿河台の頃の難治研を知っている人はほとんどいなくなって、月日の移り変わりを感じます。

1982年千葉大学医学部卒業。1993年東京大学臨床医学系大学院（医博）、米国加州DNAX研究所、東京大学医科学研究所分子生物学研究部、ヘリックス研究所（部長研究員）、ヒュービットジェノミクス（研究所長）を経て、2002年-2022年東京医科歯科大学難治疾患研究所分子疫学分野教授、2022年順天堂大学難病の診断と治療研究センター客員教授。

難研での28.5年の研究生生活の思い出

在任期間：2003年～2023年

古川 哲史

Tetsushi Furukawa



この度は、記念すべき50年史に寄稿する機会を与えていただき心よりお礼申し上げます。

私は、専攻生として半年、ポスドクとして3年、助手として5年、教授として20年、計28.5年も難治疾患研究所にお世話になりました。20年間の教授生活で、当初は研究室運営の経験もなく、研究費も心許なく、同じころ教授になった方たちと「自分たちは松竹梅の梅教授」だと愚痴を言い合ったり、「梅は学問の神様だから梅教授も悪くない」と励まし合ったり、と今となっては懐かしい思い出です。教授の最初の10年は、週7日朝から晩まで実験をし、毎日実験を終え0:17の終電に走り乗り、終電を逃した時は徒歩で帰宅し、何回警官に職質を受けたことでしょう。それでも毎朝今日は何をしようとワクワクして出勤し、研究生

活で最も楽しい時でした。10年程たつと毎日実験室で過ごすことがままなくなり、試薬の場所を学生に聞かないと実験できなくなった時、スタッフ・大学院生の足を引っ張っていると感じ、自ら手を動かすことを断念しました。実験好きの身としては不完全燃焼の時期であり、理事となった今は研究者が研究に専念できる時間を確保することを最重要課題と考えています。

東京工業大学との統合を控え、難治疾患研究所も大きな転換期を迎えています。若手の教授の方々には向こう10年、20年の方向性を見据えて、一回りも二回りも大きな研究所に発展することを心より期待しています。

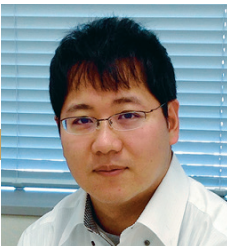
1983年東京医科歯科大学医学部卒業、1989年東京医科歯科大学大学院修了、1989年米国マイアミ大学留学、1991年日本学術振興会特別研究生、1994年難治疾患研究所助手、1999年秋田大学医学部生理学助教授、2003-2023年難治疾患研究所生体情報薬理学分野教授、2021年東京医科歯科大学理事・副学長（研究・改革）。

多くの先輩の先生に応援いただいた難治研

在任期間：2013年～2018年

石川 俊平

Shumpei Ishikawa



2013年、自分が難治研に来た頃はやる気にはあふれていましたが、人間的にも未熟でまた研究室のマネージメントに何が必要かもよく分かってなかったように思います。24Fにある研究室を頂き眺めは群馬の山まで見渡せて大変気に入りましたが、まさらの部屋からの立ち上げで、これまで普通に使っていた実験デスクやシンクが非常に高いものだということも初めて分かりました。稲澤先生はじめ他の先生方から中古の機器などをまわしてもらったのはありがたいことでした。教授会でも半人前の扱いで負担のかかる仕事はベテランの先生がやってくださって、今から思うと未熟な私が研究に集中できるように配慮してくださっていたのだと思います。難治研の先生は皆研究を大切にしている先生が多くいらっしゃいました。研究分野

も違うので最初はその凄さがよく分かりませんでしたが、シンポジウムやセミナーなどで同じ話題を聞いている際に質問される内容を横で聞いて各先生の凄さに気付かされるという感じでした。特に自分が在籍していた時に研究所長を務められた北嶋先生には難治研として気持ちよく働けるための運営の仕方、石野先生には興味に動かされる基礎研究の大切さを教えていただいたように思います。基礎研究を取り巻く環境も厳しくなっている一方で、難治研はサイエンスとして面白くまた力強い研究を続けていてもらえることを願っています。自分の人生の大切な思い出です。ありがとうございました。

2000年東京大学医学部卒、東京大学先端研ゲノムサイエンス部門、医学系研究科人体病理学分野を経て、2013年1月東京医科歯科大学難治疾患研究所ゲノム病理学分野教授、2018年現職の東京大学大学院医学系研究科衛生学分野教授。

「祝50周年、時を超える研究所に感謝」

在任期間：2009年～2022年

西村 栄美

Emi Nishimura



50周年、心よりお慶び申し上げます。私は2009年に幹細胞医学分野の教授として着任し12年余にわたりお世話になりました。私がはじめて難治疾患研究所について知ったのは、高校生の頃に本屋で立ち読みしていた時のことです。難病もその基礎を研究すれば治療へと繋がるという強いメッセージを受け取ったのを今も覚えています。そんな憧れを抱かせてくれる研究所に初の女性教授として着任して間もないころ、はじめて湯島聖堂に足を踏み入れたときに、以前から知っていたかのような既視感がありご縁を感じたことを思い出します。お陰様で私たちは組織幹細胞の研究を中心に皮膚の再生や老化のメカニズムの解明に取り組み、その成果を東京医科歯科大学から世界に向けて発信することができました。これも全て研究活動を

支えてくださった執行部の先生方の献身的なご尽力あつてのことです。田中学長、仁科所長はじめ多くの先生方に大変お世話になりました。この場をお借りして皆様に心より感謝申し上げます。皮膚科の先生方とも共同研究をさせて頂き今も引き続きお世話になっております。2021年から東京大学に活動の場を移しながら後進の育成や創業にも貢献すべく日々を過ごしております。機会を見つけて恩返しや女性活躍の後押しへと繋げていきたいと思います。難治疾患研究所の50周年の節目に、あらためてその普遍性を持つ尊い理念のもと時を超えた更なる進化と発展を祈念いたしております。

1994年滋賀医科大学医学部卒業。京都大学皮膚科勤務。1996年京都大学大学院医学研究科博士課程。2000年ハーバード大学ダナファーバー癌研究所研究員。2004年北海道大学特任助教授。2006年金沢大学がん研究所教授。2009年難治疾患研究所幹細胞医学分野教授。2021年東京大学医科学研究所教授。